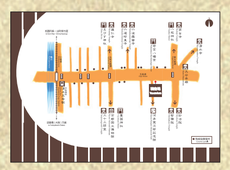
五条通がアートになりました。

清水五条陶板の散歩道

題字：森清範　清水寺貫主

清水五条陶板の散歩道



各作品の隣には、五条通周辺の観光案内標識や地図が設けられています。案内標識をたよりに五条通周辺の散策をお楽しみください。

五条坂陶栄会
河崎　尚志

五条坂周辺は、多くの陶工や陶器問屋が集まる陶器の町として江戸時代後期より栄えてきました。現在でも多くの陶芸家が活躍し、問屋や小売店で賑わう陶器の町です。

このたび、「五条通（川端通～東大路通間）」の電線地中化にともなって地上機器が設置されるにあたり、清水焼の産地という特色を活かして、地域の活性化に役立てようとの思いから実現したのが、この「清水五条陶板の散歩道」です。

五条坂にゆかりのある陶芸家、窯元10名と水彩画家、切絵作家の計12名が制作した陶板に、地図と案内標識が組み合わされています。"ただのパネルではなく、本物に触れてほしい。"との想いから、「散歩道」のために特別にデザイン・制作された秀作ばかりです。

清水寺や祇園も隣接する五条坂。バスや電車を降りて、のんびりと歩きながら作品に触れてみてはいかがでしょうか。通り沿いに立ち並ぶお店やギャラリーにふらりと立ち寄ってみるのもまた一興。きっと"陶器の町"を身近に感じていただけることと思います。

清水焼

五条坂陶栄会
井原　道夫

京都の製陶業は、江戸時代に入り特に東山山麓で発展を見せました。かつて東山山麓は良質の陶土が採れたため、多くの陶芸家が集まり五条坂の傾斜を利用した登り窯が多数築かれました。近世に入り東山では陶土は採れなくなりましたが、以降、東は信楽や瀬戸方面、西は有田方面から良質の陶土が運び込まれることとなります。登り窯も火災や煤の問題から市内では姿を消しましたが、技術改革された高性能の窯が登場し、職人が制作を続けています。

また、古都・京都は公家が文化をけん引してきた地であり、焼物の一大消費地でした。文化人の要望に答えるべく、京都の陶工たちは各地の陶土を吟味し、配合し、さまざまな技法を取り入れ、新しい手法を生み出し、新しい器作りをしてきました。これが、清水焼の一番の特徴であると言えます。

一つひとつ手作りだからこそ使い手のニーズに対応でき、職人たちもそのニーズに応えられる高い技術力を有しています。それぞれの窯元が、さまざまな手法を用いて古くからの伝統を大切にしながらも、使い手と共に常に新しいものを創造していくことを目指しています。

取材レポート

【発行】清水五条陶板の散歩道づくり実行委員会
（五条坂陶栄会　五条会　京都女子大学　京阪電気鉄道
京都市　東山区役所　東山３Ｋ協力金会議）

【お問い合わせ】五条坂陶栄会 担当
河崎 尚志　TEL：075-561-4089
井原 道夫　TEL：075-541-5101

【制作協力】文：南真理子（京都女子大学新聞部）
写真：山本彩　宮本佳奈　大村こころ（京都女子大学写真部）
イラスト：大村こころ
デザイン：佐々木直子（京都女子大学うボラトリースタッフ）

※紙面に掲載している写真・デザイン等の無断転載を禁ず

09 『東山四季図』

東山の季節の移ろいをイメージした作品。薄赤土で作った陶板の上に白化粧土で流水と四季の花の絵を型取り、流水は鉄絵で描き、花や葉には上絵付、金彩を施している。

京都の四季は美しい。その美しさを、流水に桜・菖蒲・紅葉・椿をあしらい、華やかに描くことで表現しました。焼き物の魅力は、自然の素材と人の手によって作られる"温かみ"ですが、その地域のもつ景色や風土を取り込むことも魅力のひとつだと思います。京都にはまだ自然がありますので、四季を身近に感じられる場所としてこれからも残っていってほしいですね。

六兵衛窯
Rokubey-gama

江戸後期（1771年）に初代六兵衛が京都・五条坂に窯を開いて以来、様々な名品を世に送り、京焼の本流として親しまれる。
六代六兵衛が現在の六兵衛窯の基礎を作り生活陶器全般の制作をはじめたが、現在は八代の監修の下に伝統的な京焼の作風を生かしつつ、現代にマッチした製品を作っている。

10 『東山の四季』

五条界隈に見られる春夏秋冬の事物を描いた作品。河井家に代々伝わる釉薬で絵付けを施している。表現しようつ絵の具の種類を変え、四季折々の微妙な表情を描いている。

私が幼かったころは、五条にも多くの登り窯が立ち並んでいました。登り窯というのは、産地の工人たちが経験と勘で作り上げた文化なんです。現在の主流である電気やガスの窯もいいですが、私はやはり自然のものがいいと考えています。作品を窯に入れた後は、経過が気になる衝動を抑え、窯に任せ、祈るしかありません。こうして毎回初心のつもりで、土に感謝し、窯に祈りながら制作しています。

河井透
Toru Kawai

1941年　陶工河井武一の長男として生誕
1962年　父のもとにて作陶生活に入る・併せて大叔父寛次郎に薫陶を得る
1977年　広島福屋にて父子展（以後継続）
1983年　東京・大阪・京都・米子高島屋にて個展（以後継続）

11 『清水の舞台から望む』

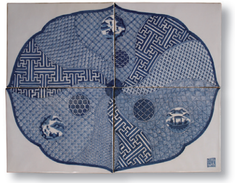
清水の舞台から見える京都を描いた作品。鉛筆コンテで描かれた線に透明水彩絵の具で着彩。ドローイング法によって微妙な空気感を表現している。構図は清水寺の擬宝珠（きぼし）を前面に押し出したもの。

清水寺の擬宝珠は何百年も前からそこにいて京都の街を見ているんです。擬宝珠を人に見たて、そこに佇んでいるように描きました。描く際には、特に光の表現や質感にこだわっています。私はこれまで、失われていく景色を残す意味も込めて古い建築物などを多く描いてきましたが、今回の作品は普段と少し違ったものに仕上がったと思います。

水津俊和
Toshikazu Suizu

1951年　島根県津和野に生誕
1974年　京阪電鉄入社
1994年「16歳になった我が娘」でOBP文化祭金賞
1998年「鉛筆コンテが観た京阪沿線の建築物」個展
2005年「鉛筆コンテが観た関西のふる里」個展
2007年「鉛筆コンテが観た関西えーとこ」個展
2009年「鉛筆コンテが観た京阪沿線の美景」個展

12 『染付の極　祥瑞』



染付祥瑞をコンセプトにした作品。呉須の発色を考えて天草磁土と出石上石を独自に配合し上品で風格のある表現のために田呉須を主体に調合し下絵付を施している。

日ごろ制作している皿の図柄をモチーフに、作風を写しました。私の工房では、一人では作品が作れません。元となる形を作る人、彫刻を施す人、絵を描く人など各工程でさまざまな人が関わっています。職人によってタッチが違ったり、同じ人が描いても色の出方が変わったりして表現には苦労します。この作品は職人皆で作りあげた作品と言えますね。

山本壹楽
Ichiraku Yamamoto

初代壹楽は、清川一陶のもとで修行後、五条坂に築窯。以来彫を施した上に、祥瑞、花鳥等を染付けし力強い作風を追求。二代目壹楽は平成二年に壹楽窯を継承し、磁器を主とし、京焼の伝統と機能性の一体化を目指し続けている。
先代の作風を踏襲し、彫の上に重厚な染付けを施した力強い作風を追求している。

清水五条陶板の散歩道

01 『四季清水』

清水の四季を描いた作品。磁土を石膏型を用いて鋳込みで起こして生地を制作。素焼きの後、当家伝来の呉須で下絵を描き本焼。さらに多彩な顔料で上絵を描き錦窯で仕上げている。

本企画のテーマを受け、幼いころから遊んでいた清水の四季を図案に選びました。作品サイズが大きかったため、4分割した陶板の1枚にひとつの季節を描き、四季を組み合わせました。季節の草花と清水の風景に紋様を合わせ、当工房の染付の技法で描いています。窯によって顔料の色の出方や表情が変わるので、何度も試行錯誤を重ね、でき上った作品です。

高木岩華
Ganka Takagi

1957年 京焼窯元 岩華の長男として生誕
1977年 先代岩華に師事
1993年 京焼・清水焼展 近畿通商産業局長賞
1995年 京焼・清水焼展 京都新聞社賞
1996年 伝統工芸士認定
2004年 五代 岩華を継承
2005年 中国景德鎮国際陶磁博覧会招待出品
現在　京都伝統陶芸家協会会員

02 『故郷は清水寺の塔の下』

東山を背景に清水寺や五重塔を描いた作品。代表的な顔料である呉須（こす）を使い、手描きの面白さを表現している。下地には白掛を施すことにより、呉須が美しく発色している。

清水寺のふもと、五条坂は清水焼発祥の地です。この地からは多くの有名陶工を輩出しています。また、名もない若い陶工たちもその歴史を感じながら制作に励んでいます。そういった、“陶器の町”を意図して今回の作品を制作しました。

藤平正文
Seibun Fujihira

・天智を仰ぎ「土耳古青釉唐草文大花瓶」御賀上の栄を賜はる
・朝日新聞社主催朝日新人展 出品
・中小企業庁長官賞 受賞
・通産大臣賞 受賞
・京都クラフト展 出品
・シャンデルシャルマン展 出品
・京都陶磁器卸組合新作展知事賞 受賞

03 『清流』

清水寺の音羽の滝から鴨川へと続く水の流れをイメージして作品。太胎を削りにとっておる緑のガラス質は天然の樫やおがの灰を塗って焼いたもの。白い部分は藁灰を使用している。

清水から続く流れには、水だけでなく長い歴史と伝統も流れていると思います。それを、土、木、火など自然界のさまざまな素材を使う焼き物という形で表現しています。この陶板は日常的に人の目に触れるものなので、地元の方の目も意識しました。作品を見て、心が安らぐ・ほっとするよう思ってくださる方が一人でもいればと思います。

猪飼祐一
Yuichi Ikai

1963年 京都五条坂の陶器商に生まれる
1984年 清水卯一・俣孝両氏に師事
1985年 日本工芸会近畿支部展 初入選
1986年 日本伝統工芸展 初入選
1994年 日本工芸会 正会員に認定
1996年 京都府南丹市日吉町に工房移転
2001年 日本伝統工芸近畿展 近畿賞
2004年 日本伝統工芸近畿展にて鑑査委員就任
2007年 登り窯 築窯

04 『はり絵・清水寺雪景』

雪交じりの清水寺を描いた作品。アクリルカラーやパステルで下地を描いたイラストボードに カラーペーパーを切り重ねていくこはり絵の技法を用いている。

清水寺は雪景色がよく似合います。雪の降る日にスケッチに清水を訪ねました。私は京都の町家を題材に作品を制作することが多いのですが、基本としてその佇まいに一番似つかわしい季節を選んで描くようにしています。今回のように寺社仏閣を描くことは珍しいですが、清水寺は絵心を掻き立てる対象です。

出井豊二
Toyoji Dei

1948年奈良県生まれ
現在、京都女子大学教授
個展
・西武百貨店川崎（神奈川）・ギャラリー贊（京都）・ギャラリー紫苑（京都）
・The Herbert Read Gallery（イギリス）・ギャラリードットアートコスモ（大阪）
・みやこめっせ（京都）・京都館（東京）・ギャラリーテラ（京都）・秦家住宅（京都）
などで多数開催

05 『古都春秋』

清水焼陶祖のひとり、尾形乾山の図柄をアレンジした作品。乾山の図柄を写し、陶泉窯の特色である下絵付けの技法により、釉薬の下からやわらかな色彩が浮かび上がっている。

五条坂は清水焼発祥の地ということで、陶祖・乾山の図柄を写すことにしました。4枚の陶板に分けて制作したので、つなぎ目の部分の取り合い調整するのが難しかったです。下絵付けを用いた作品の特徴である“やさしい風合い”が上手く表れていると思いますので、ご覧いただく方には、ぜひそこを見てもらいたいですね。

陶泉窯
Tosen-gama

・明治以降の老舗銘“陶泉”を以って“陶泉窯”と称して食器の生産を開始。
・陶器製のマホー瓶として“チャイナーマホー瓶”を開発し生産を開始。
・現代感覚にマッチした器づくりを目指し均窯釉、天目釉を開発。
・陶器業百年以上に亘る業績により、京都府知事表彰を受ける。

06 『五条坂』

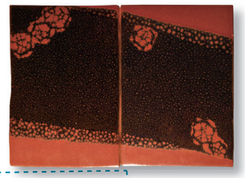
平安から続く清水焼のメッカをコンセプトにした作品。浅見家伝承の象嵌（ぞうがん）技法（生地に印で凹みを作り焼いた後、凹みを白い土で埋め、余分な土をふき取り再び焼くこを用いている。

この作品は、デザインを考えるのにもっとも時間をかけました。東山に生まれ、四季折々を見てきた自分の想いをどう作品に反映するか、自分の持つ技術の中でいかに五条坂を表現するか、そんなことを考えながら制作しています。中央のラインが五条坂、周囲の細かい柄は木や草花などを抽象的に描いたものです。季節や見る人の感性によって見え方も違ってくるはずですよ。

浅見五郎助
Gorosuke Asami

嘉永初年（一八四七年）頃、五条坂にて浅見家の初代五郎助が登り窯を築く。
創業以来各代に亘って伝統工芸の興隆発展に努め、一九四三年には国より三島手の技法の技術保存作家の指定を受け、五郎助風の作陶は益々高く評価され、特に洗練された味わいをさりげない素朴さで表現した三島手・刷毛目手を最も得意としている。

07 『鉄釉鉄彩文　道』



五条坂がテーマの作品。釉薬の発色を考え、今回の陶板のために調整した陶土を叩いたたらにした鉄分を含んだ釉薬を数種類用いて表現している。

62年間住んでいる五条周辺にはやはり愛着がありますからね。今回はそれを題材に選びました。作品作りにおいては周囲の影響を受けることもあります。今回、陶板作りは初めて だったので戸惑いがありましたが、イメージがなかなか浮かばずなかったとき、訪れた信楽で目にした大きな陶板からヒントを得ました。作品を作り始めると面白く、楽しみながら作ることができました。

清水保孝
Yasutaka Shimizu

1971年 父、清水卯一に師事
1972年 日本伝統工芸展 初入選
1973年 日本工芸会近畿支部展 近畿支部長賞
1977年 同上 日経賞助賞
1981年 同上 松下賞
1987年 日本工芸会近畿支部展鑑査委員、以後鑑査委員
1994年「藍釉鼎彩亀遊文大鉢」京都府に収蔵
2009年 伝統工芸陶芸部会展 日本工芸会賞

08 『五条坂昔景』

登り窯と五重塔、京都東山の遠景を表現した作品。たたら作りに適した荒めの陶土を何度も叩いて生地を制作。半乾きの状態で図柄を浮き彫りにし、伝来の釉薬を調合し直して掛け分け高火度で焼成している。

昔から京都にあるもの、誰が見ても京都と分かるものを題材に選びました。既定のサイズの中で表現するのが難しかったですね。なかなか思い通りの色が出ず、3回も作りなおしました。五条坂周辺は観光地というより工業地なんです。この作品を通して“もものづくりのまち”としての五条坂を知ってもらえればと思います。

小川興
Kou Ogawa

1974年 陶芸家 五代小川文斎の長男として生誕
2002年 京展 補助賞
2002年 日展 初入選
2003年 日本新工芸展 日本新工芸奨励賞
2004年 日本新工芸展近畿展 読売新聞大阪本社賞
2005年 日本新工芸展 東京 都知事賞
2006年 日本新工芸展近畿展 読売テレビ放送賞
2009年 京都工芸美術作家協会展 協会奨励賞